

近世グローバル社会における銅板油彩画—カルロ・ドルチ作《親指の聖母》に注目して 平川佳世（京都大学）

銅板に油絵具で絵を描く「銅板油彩画」は、パラゴネ論争で指摘された絵画芸術の弱点を克服する、薄くて見目のよい小型絵画を実現する、描かれた政治的寓意に物質・象徴の両面において不朽性を付加するといった芸術的・美的な企図のもと、1530年代以降、イタリア人画家によって制作が開始された。銅板油彩画は、やがて、イタリアに滞在する北方画家を通じてアルプス以北にも伝播し、17世紀には汎ヨーロッパ的な人気を博すこととなる。一方、人の手の関与を感じさせない鏡面のような滑らかな仕上がりに、対抗宗教改革期のカトリック教会が求める宗教画の理想的な在り方を見出したのは、教皇ピウス5世であった。教皇の愛好を契機に、銅板油彩画はカトリック教会の宗教画に積極的に取り込まれていくが、特筆すべきは、世界布教に旅立つ宣教師が、その物質的な耐久性から、イエスや諸聖人の姿を描いた銅板油彩画を好んで携帯したことである。

前近代に宣教師や海外に渡航したキリシタンがもたらした銅板油彩画が、日本各地の博物館・美術館にも所蔵されている。なかでも、傑出した美的質を有するのが東京国立博物館蔵《親指の聖母》である。本作品については、17世紀フィレンツェの画家カルロ・ドルチ作であること、1708年に日本に入国した「最後の宣教師」ジョヴァンニ・バッティスタ・シドティの携帯品であること、新井白石がシドティ尋問に際して検分した聖母子像がまさにこの作品であったことを、早くも1950年代に内山善一が鋭く指摘している。本発表では、フランチェスカ・バルダッサリ、カロリーナ・カップッソ、今村英明ら、歴史諸学の近年の研究成果に照らして内山説を検証し、それが概ね妥当であることを改めて示す。加えて、ドルチの他作品およびそれらの銘文との比較から、本作品に特徴的な「右手の親指だけをマントから出す」身振りが、聖母の慟哭と品位を同時に鑑賞者に伝える優れた着想であること、聖母の哀悼はイエスのみならず全キリスト教徒の苦しみに向けられており、史上まれにみる宗教弾圧が行われた日本に「教皇庁の宣教師」として派遣されることとなったシドティが選ぶにふさわしい聖母像であったことを、新たに論証する。また、シドティがドルチ作品を入手し得たことには、彼が聴聞補佐官を勤めたドミニコ会所属の枢機卿トンマーゾ・マリア・フェッラーリが関与した可能性を指摘したい。

尋問という形を借りたシドティと白石の知的対話およびシドティの悲劇的な死は、詳細が白石著『西洋紀聞』等に記されていることもあり、これまで多くの文筆家を魅了してきた。本発表の最後には、2014年のキリシタン屋敷発掘で得られた成果、および、《親指の聖母》の保存状態という物質的状况を分析することで、カトリックを信奉するシドティと儒学者白石の思想的対立と和解の諸相について、美術史研究者の立場から提言を行う。